

話題分類に基づく動詞の記述方法 —日本語学習者用辞書のために—

橋本 直幸

1. はじめに

日本語学習者用の辞書については、『基礎日本語学習辞典』を始めとしてこれまでに多数出版されている。また、動詞に限ったものではあるが、『日本語基本動詞用法辞典』なども大いに参考になるものである。それぞれの動詞が要求する格成分ごとに「意味・文型」を分けていたり、「文法情報」として、受身、使役、可能、相などそれぞれどのような形式をとるか記述したりしている。また、その動詞を含む複合動詞や、慣用句、類語なども示されており、理解だけでなく産出に結びつくものとしても利用できる。『日本語コロケーション辞典』のように、具体的な語と語の結びつきの例が詳しく示してあるものもある。ただし、いずれも詳細に記述されてはいるが、それぞれの形式や結びつきが、どのような場合に典型的に使用されるかということとはわからない。同じ動詞でも使われる場面や話題によってその出現形式や選ばれる構文に偏りが出ることはないのだろうか。

本稿ではこのような問題意識から、動詞の記述において「話題」という概念を導入することにより、従来の辞書で記述されてきた意味・文法情報、形式、類義語などを有機的に関連づけ記述することができるということを主張したい。筆者はこれまで、橋本（2010）、橋本・山内（2008）などで、日本語教育、とくに語彙の教育と研究において「話題」という概念を導入することのメリットについて述べてきた。本稿の試みもこの一環として、日本語教育における「話題」の概念の重要性を示唆するものとして検討してみたい。

2. 『日本語基本動詞用法辞典』

ここでは、例として、『日本語基本動詞用法辞典』について見る。これは、1989年に刊行された動詞の辞典で、「序」に「この辞典は、最近の日本語研究の成果に立脚し、国際的に盛り上がってきた日本語学習熱と、これに対する日本語教育の要求に応じようとするもの」と明記されていることからわかるように、日本語教育および学習のための辞書として位置付けることができよう。具体的にそれまでの辞書と異なる点について、「序」の中の解説部分から確認しておきたい。

この『日本語基本動詞用法辞典』は、基本的な動詞 728 項目について、まず、各動詞がどのような助詞をとるかそれぞれの文型を示し、これに対応する語義を与えて、例文を提示してある。さらに、文法情報として、受身では直接と間接の別を明示し、使役形、可能形および意志形、命令形、禁止形の有無を指定し、アスペクトの用法を解説しておいた。（序. iii）

また、この文法情報のほかに、見出し語の動詞の語形変化（否定形・連用形・過去形・

中止形・条件形二種)、その動詞を含む「複合動詞」「慣用句」、主要な「類語」なども掲載してある。例として、以下に動詞「選ぶ」について書かれた部分を引用する。

<p>えらぶ 選ぶ</p> <p>【意味・文型】</p> <p>(1) いくつかのものの中から、条件・目的に合うもの、または、好ましいものを取り出す。</p> <p>《文型 a》[人・組織]{が/は}([人・組織・物・事・時・所]@(の中)から)[人・組織・物・事・時・所]を選ぶ</p> <p>☑ 私たちは年長者の中から代表を選んだ・代表的作品2点を選ぶ・大統領[候補者]を選ぶ・いい下宿を選ぶ・2球ボールを選ぶ・右へ行く方を選ぶ</p> <p>《文型 b》[人・組織]{が/は} [文] {こと/の} を選ぶ</p> <p>☑ あなたはあの時ここに残ることを選んだ・家業を継ぐことを選ぶ</p> <p>《文型 c》[人]{が/は}[人]に[人・物]を選ぶ</p> <p>☑ 娘が私にこのネクタイを選んだ・息子に嫁を選ぶ</p> <p>《文型 d》[人・組織]{が/は}[人・物・事]を[人・物・事]に選ぶ</p> <p>☑ 委員たちは加藤氏を次期委員長に選んだ・新人候補を市長[知事]に選ぶ・大安の日を結婚式の日を選ぶ・銀の食器を引出物に選ぶ</p>	<p>【用法1】《文型 c》の「～に」と「～を」を入れ換えると不自然になる。</p> <p>【用法2】《文型 d》の「～を」は選ぶ対象となる物事を言い、「～に」は選ばれた結果としての物事を言う。</p> <p>(2) より好みをする。</p> <p>《文型》[人]{が/は}[物・事]を選ばない</p> <p>☑ あの連中は手段を選ばない・名人は道具を選ばない</p> <p>【用法】普通、否定の形で使われる。</p> <p>【文法情報】</p> <p>《受身》[直接]うちの息子が代表に選ばれた</p> <p>【(1)の時】[間接]先にテーマを選ばれてしまった【(1)の時】</p> <p>《使役》娘に気に入った靴を選ばせた・彼らには手段を選ばせない</p> <p>《可能》自分たちの中から委員長を選べる・手段を選べない</p> <p>《相》[テイル形]母は商品棚から品物を選んで(動きの最中)・委員会は彼の作品を金賞に選んでいる(経験・完了)[テアル形]代表選手をもう選んである(有効性の持続)</p> <p>《意志》この部屋に合うソファを選ぼう【(1)の時】</p>	<p>《命;禁》この中から好きなものを選び【(1)の時】;彼を委員長に選ぶな・手段を選ぶな</p> <p>【語形】</p> <p>《否定》えらばない 《連用》えらび</p> <p>《過去》えらんだ 《中止》えらんで</p> <p>《条件》えらべば 《条件付》えらんだら</p> <p>【複合動詞】</p> <p>選び出す【(～から)～を】:多くのものの中からひとつを選んで取り出す。☑ 真由美はいろいろある中から赤い色の服を選び出した</p> <p>選び取る【(～から)～を】:選んで自分のものとする。☑ きれいな色のものを選び取った</p> <p>【慣用句】</p> <p>選ぶところがない:違いがない。☑ 経済観念ということになると、彼女は子供と選ぶところがない</p> <p>【類語】*選択する, *捜す, *決める, *取る</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

図1 『日本語基本動詞用法辞典』の記述例 (pp. 78-79)

従来の国語辞典からではわかりにくかった補語(格成分)との結びつきや、活用形、関連する複合動詞や慣用句、類語などを掲載しており、具体的な使われ方がイメージできる辞書である。補語については、単に助詞だけが示されるのではなく、「[人・組織]{が・は}[人・物・事]を[人・物・事]に選ぶ」のように、具体的にどのような種類の名詞が入るかまで示されている。

しかし、最初に述べたように、これらの文型や活用形、複合動詞、類語などが、どの場合にも等しく使われるというわけではないだろう。例えば、<受身>の例文として、「うちの息子が代表に選ばれた」とあるが、受身形の「選ばれる」として、まず思い浮かぶのは、ここに挙がっているようなスポーツの代表選考のような例文ではないだろうか。また、【類語】として、「選択する」「捜す」「決める」「取る」とあるが、場面や話題によって、類語となりうるものもあれば、そうはならないものもあるだろう。このことから、「話題」という観点で、この記述を見直すことを考え、次のような提案を行いたい。

3. 提案—話題情報の付与

前節までに挙げた問題意識から、それぞれの語の記述に「話題」という概念を付与することを提案し、その有効性について述べたいと思う。ここでいう「話題」とは、「食」「ス

スポーツ」「ファッション」「教育」「政治」「経済」「自然」といった、一般的な意味での「話題」である。ただ、「話題」の定義はあいまいで、「話題」が一体いくつあるのか、「料理の作り方」と「食文化」は同じ話題なのか、異なる話題なのか、といった問題は残る。しかし、言語教育では「話題シラバス」という名でシラバスのタイプの一つとして位置付けられている他、ガイドラインやスタンダードなどを構成する基準としても重要視されている要素である。何より、すべての言語活動は何らかの話題に基づいて行われているわけであり、学習者がさまざまな言語活動を遂行できるようにすることを言語教育の目的と掲げる以上、必須の概念であることは間違いない。また、実質語（内容語）は、その名の通り、話題の内容を支える実質的な意味を持った語である。つまり実質語教育において「話題」という概念は欠かせない要素であると言える。

この論文では、それぞれの動詞がさまざまな構文、活用形、コロケーションとしての組み合わせを持つ可能性はあるにせよ、それは話題によってある程度偏りがあるのではないかという仮説に立ち、考察を行う。例えば、先に例に挙げた「選ぶ」という語であれば、「スポーツ」の話題であれば「代表に選ばれる」のような形式が多く使われるだろうし、「試験」という話題であれば「選びなさい」などのような形が多く使われるだろう。類義語を考えてみても、「スポーツ」では「選抜」、「テスト」や「コンピュータ」の話題などでは「選択」といった語をよく目にする。従って、さまざまなバリエーションがある活用形や、複合動詞、類義表現などを、「話題」という概念を通して有機的に結び付けようとするのが本稿の試みである。

4. 話題分類に基づく記述例 ——動詞「選ぶ」を例に

4.1 手続き

本稿では次の手順により、先の提案をかたちにするための調査・考察を行う。まず、対象となる動詞が、どんな話題でよく使用されるのかを決める。次にその動詞が、使用される話題の中でどのような振る舞いをするか話題別のコーパスデータから実態調査を行う。そして、その結果をもとに使用傾向を把握する。また、既刊の『実践日本語教育スタンダード』に収録されている語彙・構文リストが役に立つことを述べる。本稿では試みとして動詞「選ぶ」を対象語とする。

4.2 『実践日本語教育スタンダード』の概要

まず、対象となる動詞が使用される話題を決めておく必要がある。この作業にあたっては、山内博之の編『実践日本語教育スタンダード』（2013年）を使用した。これは、日本語学習者の言語活動と、それを支える言語素材（語彙・文法）を結びつけることにより、効果的かつ日本語の実態に合わせた教育、学習、評価の指針となるべく作成されたスタンダードである。この第1章では、「話題」を言語活動の基準として、4領域、16分野、100話題（以下、表1）をまず設定し、それにあわせたロールプレイと語彙・構文リストが提示さ

れている。なお、この語彙表の作成は、本稿筆者である橋本が携わった。

表1 『実践日本語教育スタンダード』の「話題」

領域	分野	話題
生活	1. 文化	1.1 食、1.2 酒、1.3 衣、1.4 旅行、1.5 スポーツ、1.6 住、1.7 言葉、1.8 文芸・出版、1.9 季節・行事、1.10 文化一般
	2. 人生・生活	2.1 町、2.2 ふるさと、2.3 交通、2.4 日常生活、2.5 家電・機械、2.6 家事、2.7 パーティー、2.8 引越し、2.9 手続き、2.10 恋愛、2.11 結婚、2.12 出産・育児、2.13 思い出、2.14 夢・目標、2.15 悩み、2.16 死
	3. 人間関係	3.1 家族、3.2 友達、3.3 性格、3.4 感情、3.5 容姿、3.6 人づきあい、3.7 喧嘩・トラブル、3.8 マナー・習慣
	4. 学校・勉強	4.1 学校（小中高）、4.2 学校（大学）、4.3 成績、4.4 試験、4.5 習い事、4.6 調査・研究
人文	5. 芸術・趣味	5.1 音楽、5.2 絵画、5.3 工芸、5.4 写真、5.5 映画・演劇、5.6 芸道、5.7 芸術一般、5.8 趣味、5.9 コレクション、5.10 日曜大工、5.11 手芸、5.12 ギャンブル、5.13 遊び・ゲーム
	6. 宗教・祭り	6.1 宗教、6.2 祭り
	7. 歴史	7.1 歴史
社会	8. メディア	8.1 メディア、8.2 芸能界
	9. 通信・コンピュータ	9.1 通信、9.2 コンピュータ
	10. 経済・消費	10.1 買い物・家計、10.2 労働、10.3 就職活動、10.4 ビジネス、10.5 株、10.6 経済・財政・金融、10.7 国際経済・金融、10.8 税
	11. 産業	11.1 工業一般、11.2 自動車産業、11.3 重工業、11.4 軽工業・機械工業、11.5 建設・土木、11.6 エネルギー、11.7 農林業、11.8 水産業
	12. 社会	12.1 事件・事故、12.2 差別、12.3 少子高齢化、12.4 社会保障・福祉
	13. 政治	13.1 政治、13.2 法律、13.3 社会運動、13.4 選挙、13.5 外交、13.6 戦争、13.7 会議
自然	14. ヒト・生き物	14.1 人体、14.2 医療、14.3 美容・健康、14.4 動物、14.5 植物
	15. 自然	15.1 気象、15.2 自然・地勢、15.3 災害、15.4 環境問題、15.5 宇宙
	16. サイエンス	16.1 算数・数学、16.2 サイエンス、16.3 テクノロジー

(数字は、話題番号)

本稿では、この話題分類と語彙表を使用し、対象となる動詞がどの話題で使用されているかを規定することとする。例として、「選ぶ」という動詞を見てみると、この語は、以下の話題に分類されている。

(例)「選ぶ」…1.3 衣／1.5 スポーツ／4.4 試験／9.2 コンピュータ／10.3 就職活動／11.5 建設・土木／16.3 テクノロジー (以上、7 話題)

この語彙表では、一つの語が複数の話題に重複してリストアップされることを認めているため、このように複数の話題に出てくることになる。『実践日本語教育スタンダード』では、語を各話題に分類する方法として、内省による主観的分類と、書籍の大規模コーパス(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』)から統計的手法(対数尤度比)により話題特徴語を抽出するという客観的分類をあわせたかたちをとっている。詳細は山内(編)(2013)を参照されたい。

4.3 コーパスにおける出現傾向

次に、コーパスを用いて、実際にそれぞれの話題の中で、「選ぶ」がどのようなかたちで使用されているか、その出現形式を見てみることにする。ここでは、「現代日本語書き言葉均衡コーパス（2009年版領域内公開データ）」の書籍データを使用する。書籍データには、NDC（日本十進分類法）の記号が付されているので、表1に示した100の話題と対応をさせ、話題別のコーパスを作り、それぞれの話題の中での「選ぶ」の出現形式を見た。

表2は、それぞれの話題の中で、「選ぶ」がどのような語形で使用されているかを表したものである。「試験」「就職活動」「建設・土木」はデータとなる収録書籍数が少ないため、数値は出していない。また、「テクノロジー」は主に「コンピュータ」とデータが重なるため、「コンピュータ」と一括して出している。各話題のデータ量が均一ではないため、単純に話題ごとの数を比較することはできないが、それぞれの話題の中で最も使用される形式はどれかという観点から見た場合、それぞれ形式の出現数に偏りが見られた。網かけをした部分が比較的大きな偏りが見られた部分である。

表2 話題別データにおける各形式の出現傾向

形 式 \ 話 題	衣	スポーツ	コンピュータ テクノロジー
[受身] 選ばれる	5/50	47/106	4/168
[使役] 選ばせる	0/50	0	2/168
[可能] 選べる・選ぶことができる	4/50	3/106	9/168
[相] 選んでいる・選んである など	1/50	1/106	8/168
[意志] 選ぼう	3/50	0	1/168
[命令・禁止・勧め] 選べ・選ぶな・選んで	0	1/106	4/168
[希望] 選びたい	1/50	0	3/168
[終止・連体] 選ぶ	20/50	21/106	41/168
[否定] 選ばない	0	1/106	0
[連用] 選び・選んで	10/50	12/106	44/168
[過去] 選んだ	5/50	20/106	29/168
[条件] 選べば・選んだら・選ぶと	1/50	0	19/168
その他（選んでもらう など）	0	0	4/168

「スポーツ」の受身形「選ばれる」の典型例を以下(1)(2)に挙げる。

- (1) 今回は、いわゆるメジャーな国際大会であり、「これまで自分の方が挑戦する立場だったので、あまり気を使うことがなかったが、代表候補に選ばれてからは、いろいろ気を使ってしまうようになった。(スポーツ：『アスリートの心理臨床』)

- (2) ファーガソンやリッピといった世界的な監督の下でプレーしたいと思いますか？
「ぼくたちプレーヤーは監督を選べません。せいぜいが選ばれる側になるだけです」
(スポーツ：『中村俊輔イタリアの軌跡』)

そのほか、「MVPに選ばれる」「スターティングメンバーに選ばれる」「リレーの選手に恵ばれる」などがある。

次に、「コンピュータ」の話題で多かった連用形「選び」「選んで」、終止形「選ぶ」、の典型例を挙げる。

- (3) 3 一番上の「背景のコピー2」レイヤーが選択された状態で (①) 【フィルター→表現手法→輪郭検出】を選ぶ (②)。
4 引き続き【画質調整→カラー→カラーを削除】を選ぶ。
5 【イメージ→色調補正→2階調化】を選び (①)、「2階調化」ダイアログのスライダを左右にドラッグし (②)、画像の白い部分と黒の線との表示のバランスがとれる位置に設定する。最後に「OK」をクリックする (③)。
(コンピュータ：『Photoshop Elements なないろマジック』)

- (4) 画面左の「グラフの種類」欄から「縦棒」を選びます。画面右の「形式」欄から使いたいスタイルを選びます。「次へ」ボタンを押してください。
(コンピュータ：『はじめる！エクセル&ワード』)

- (5) 絞り込み／多くの候補の中から条件を選んでいき、探す対象を限定していくこと。マップルでは、住所から地図を探すときに都道府県名、市町村名と順番に選んでいく。
(コンピュータ：『日経 PC ビギナーズ』)

次に、「衣」の話題で多かった終止形・連体形「選ぶ」の典型例を挙げる。主に、連体形での使用である。

- (6) 日本では、靴を選ぶ一つの目安として JIS 規格（日本工業規格）があります。
(衣：『正しい靴の選び方』)
- (7) 実際に服を選ぶ段になると、いつも混乱し、時にパニックになり、そして最後には「こんなはずではなかったのに」と不本意な格好のまま出かけていくことが多かった。
(衣：『私のスタイルを探して』)

もちろん、データとなる書籍の内容により、同じ話題であっても出現する形式に違いが生じることは予想される。サンプルの数が少ないと、その分、個別のサンプルの特徴が反映されてしまう。できるだけ規模の大きな話題別コーパスが必要である。

4.4 「選ぶ」が要求する格成分

次に、「選ぶ」がどのような名詞を格成分として要求するか、ということについて考えた。一般に構文・文型を表記する方法としては、表層レベルの構文・文型の表示方法と、深層レベルの構文・文型の表示方法がある。表層レベルの構文・文型は、動詞がどの

ような補語（名詞＋格助詞）をとるかによって表示するものである。例えば、日本語記述文法研究会（2009）では、「動詞の文型」として、1項動詞では「[が]文型」、2項動詞では「[が、を]文型」「[が、に]文型」「[が、から]文型」「[に、が]文型」3項動詞として、「[が、に、を]文型」「[が、を、に]文型」「[が、から、を]文型」などを挙げている。これに対し、深層格レベルの構文・文型は、研究者により異なるが、10～30程度の「深層格」（「格」「意味範疇」「格ラベル」など呼称は様々）を認め、述語がどの深層格を要求するかという点から構文・文型を表示、分類するものである。例えば、仁田（2010）は、「格」として、「主」「対象」「相方」「片割れ」「めあて」「領域」「起因」「手段」「経過域」「ゆく先」「出どころ」「ありか」の12種を設定し、約1000の動詞を構文ごとに分類している。国立国語研究所（1997）は、「深層格」として、「動作主」「経験者」「無意志主体」「対象」「受け手」など形35種を設定している（注：ただし、述語の分類を行うことはせず、それぞれの表層格（格助詞）がどのような深層格に対応しているかを検討しているのみ）。以上は、日本語学における記述方法であるが、日本語教育において学習者の利便性を考えた場合、より具体的な記述が求められる。つまり、述語がどのような補語をとるのかということが、具体的な名詞とともに挙げられていることが望ましい。

その点、『日本語基本動詞用法辞典』は、「意味特性」として、[人][生き物][植物][組織][集団][機械][乗り物]のように、より具体的なラベルが貼られており、実際にそこに入り得る動詞がイメージしやすいものとなっている。さらに、『実践日本語教育スタンダード』は述語が要求する格成分としての名詞の語群を、より具体的な名詞のリストと対応させることができる。以下の表3に示すように、例えば「衣」という話題であれば、「選ぶ」対象になるものとして、【衣料】【上着】【ズボン】【下着】【目的別衣類】【履物・靴下など】【眼鏡・コンタクトレンズ】【帽子・マスクなど】【小物】【アクセサリ・香水】という名詞の語群が入り得ることを示しており、この【】で示した語群は、対応する名詞の語彙リストを見れば、具体的に入り得る動詞を確認することができるようになっている。表4が対応する名詞の語彙リストの箇所である。

表3 『実践日本語教育スタンダード』の語彙・構文リストの例（動詞「選ぶ」のみ抜粋）

話題（構文）	名詞群	助詞	述語		
			A ¹	B	C
1.3 衣 （着脱構文）	【衣料】【上着】【ズボン】【下着】【目的別衣類】【履物・靴下】【眼鏡・コンタクトレンズ】【帽子・マスクなど】【小物】【アクセサリ・香水】	を	選ぶ、決める		
1.5 スポーツ （チーム構文）	【メンバー】	が	入れる	加える、選ぶ	
	《人》	を			

¹ ABCの分類は、レベル表示である。具体物を表す語については「親密度」の観点から、抽象概念を表す語については、「必要度」の観点から分類している。「親密度」による分類は、Aが最も親密度が高い語である。また「必要度」による分類は、Aが最も必要度が高い語である。

4.4 試験 (試験の目的構文)	《選考対象》《人》	を	選ぶ		選考する
9.2 コンピュータ (操作構文)	【ファイル】【機能】	を	選ぶ	選択する	
10.3 就職活動 (就職試験構文)	【会社】	が	選ぶ		選考する
	《人》	を			
11.5 建設・土木 (工事構文)	《工事業者》	を	選ぶ		選定する
16.3 テクノロジー (操作構文)	【ファイル】【機能】	を	選ぶ	選択する	

表4 話題「衣」の名詞リストの一部 (『実践日本語教育スタンダード』より)

意味分類	A	B	C
【衣料】	服、洋服、着物	衣装、衣服、和服	衣類、衣料、アイテム
【上着】	シャツ、セーター、ワイシャツ、上着、スーツ、コート、ワンピース	エプロン、ドレス、ブラウス、毛皮、背広	ジャンパー
【ズボン】	ズボン、スカート、ジーンズ、パンツ、ジーパン		スラックス、袴
【下着】	パンツ	下着	肌着
【目的別衣類】	パジャマ、制服	浴衣、ユニフォーム、水着	寝巻き、軍服、喪服
【履物・靴下】	靴、靴下	サンダル、ブーツ、ソックス	草履、下駄、ヒール、ストッキング、足袋
【鞆】	かばん、バッグ	ハンドバッグ	
【眼鏡・コンタクトレンズ】	眼鏡、コンタクトレンズ		
【帽子・マスクなど】	帽子	マスク	冠、面
【小物】	ハンカチ、ネクタイ、ベルト、マフラー	手袋	帯、スカーフ
【アクセサリ・香水】	アクセサリ、指輪	ネックレス、ブローチ、宝石、リボン、ダイヤ、ダイヤモンド、真珠、バッジ、首飾り	チェーン
		香水	

4.5 「選ぶ」の類語について

ここでいう「類語」とは、『日本語基本動詞用法辞典』で「類語」として例が挙げられているようなもので、具体的には「選択する・捜す・決める・取る」が挙げられている(図1参照)。凡例では、「見出しの動詞と意味的に関連のある動詞のうち、主要なものを列挙した(凡例. xviii)」とあるが、具体的な動詞を見てみると、和語・漢語の対立を含め、パラディグマティックに対立する語を中心に挙げているようである。しかし、「関連する語」といっても、動詞が基本的で多義的な語ほど関連する語は多く、また話題によって当然異なってくるのが予想される。これにも『実践日本語教育スタンダード』の記述が役に立つ。『実践日本語教育スタンダード』は、それぞれの話題のなかで構文ごとに述語となる動詞・形容詞を記述しているので、必然的に同じ構文の同じ位置に入る語が、同じ枠内に記載されることになる。例えば、動詞「選ぶ」はそれぞれの話題で、以下のように類語が異なる(表2も参照のこと)。

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| (8) 衣：「選ぶ」、「決める」 | スポーツ：「入れる」、「加える」、「選ぶ」 |
| 試験：「選ぶ」、「選考する」 | コンピュータ：「選ぶ」、「選択する」 |
| 就職活動：「選ぶ」、「選考する」 | 建設・土木：「選ぶ」、「選定する」 |
| テクノロジー：「選ぶ」、「選択する」 | |

そのほか、『実践日本語教育スタンダード』には入っていないが、スポーツであれば、「選抜する」「選出する」なども入り得るだろうし、コンピュータでは「指定する」なども入れてもよいかもしれない。

5. まとめ

本稿では、日本語学習者用辞書に「話題」を付与することで、従来ばらばらに記述されていた「意味・文型」「文法情報」「類語」などを有機的に結びつけ記述することができることを示した。これにより、以下のような利点が考えられる。

- (9) 複数ある構文や意味のうち、その話題においてよく使用される構文、意味は何か、またどのようなかたちで現れることが多いかを知ることができる。
- (10) 当該話題において、その動詞とパラダイグマティックに対立する動詞を類義語として捉えることができる。

(9) は、典型的な構文や意味、出現形式を知るという意味で、例文作成や教材作成の助けになるだろう。また、(10) は、和語・漢語の選択や類語同士の微妙な語のニュアンスの違いなども含め、レベルに応じた表現の学習、指導を可能にする。

今回の試みは、それぞれの動詞の記述をより正確に、また産出に結び付くように考えたものである。ただし言うまでもなく、ここで挙げた構文や類語などは「傾向」であり、絶対的なものではない。しかし、このような「傾向」の記述に最も力を発揮するのが、コーパスである。その「傾向」の記述をより正確なものにするためにも、話題別コーパスの充実が望まれる。

参考文献

- 小泉保ほか（編）（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 国際交流基金（2004）『基礎日本語学習辞典第二版』Oxford University Press・凡人社
- 国立国語研究所（1997）『日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂
- 仁田義雄（2010）「格体制からした動詞のタイプ」『仁田義雄日本語文法著作集第3巻 語彙論的統語論の観点から』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版
- 橋本直幸（2010）「日本語教育スタンダードのための語彙表作成の方法—統計指標を用いた

話題別分類語彙表」『ヨーロッパ日本語教育』14

橋本直幸・山内博之（2008）「日本語教育のための語彙リストの作成」『日本語学』27 卷 10 号、pp.50-58、明治書院

姫野昌子（監）（2012）『日本語コロケーション辞典』研究社

山内博之（編）、橋本直幸・金庭久美子・田尻由美子（2013）『実践日本語教育スタンダード』ひつじ書房

付記

本稿は、日本語学習辞書科研平成 24 年度 第 1 回全体研究集会（2012 年 9 月 2 日、於筑波大学）での口頭発表に基づくものである。